

なぜか、茅ヶ崎に劇が。ドラマ

茅ヶ崎の風土の魅力にいち早く注目し、
庵を結んだのは劇聖とも呼ばれる
歌舞伎俳優九代目市川団十郎(1838-1903)でした。
以後、近代から現代にかけて、
茅ヶ崎を愛した文化人には演劇、映画、小説など、
とりわけ「劇(ドラマ)」に関わる人が多い。
物語を生み出す精神にとって、
この風土のもつ穏やかさ、明るさ、
透明さが必要であったのかもしれません。

反骨の俳優 川上音二郎

権利幸福嫌いな人に
自由湯をば飲みたい
オッペケペー
オッペケペッポーベッポーポー
固い上下の角取れて
マンテルズボンに人力車
意気な束髪ボンネット、
貴女に紳士のいでたちで
うわべの飾りは好いけれど、
政治の思想が欠乏だ
天地の真理が分らない、
心に自由の種を蒔け
オッペケペー
オッペケペッポーベッポーポー

明治時代、一世を風靡した『オッペケペー節』です。
これを日本人で初めてレコードに吹き込んだのが川上音二郎(1864-1911)でした。音二郎の始めた書生芝居、壮士芝居はやがて新派となり、旧劇(歌舞伎)をしのぐ人気を博し、「新劇の父」ともいわれています。

10代の終わりから自由民権運動にかかわり、過激な言動に走り、しばしば投獄されます。のちに、アメリカに渡り興行、さらにパリ万博に呼ばれて公演し大好評を博します。反骨の街頭芸人は世界のエンターテイナーになりました。

生涯のパートナーとなったのは、東京で売れっ子の芸者貞奴(1871-1946)でした。音二郎に負けず

劣らず鼻っ柱が強く、自立心旺盛の女性。二人は演劇活動の新世界を切り拓きました。パリ万博で貞奴の人气が爆発。欧米の女優たち、サラ・ベルナールやエレオノラ・ドゥーゼと同等の評価を得ました。この時代を代表する作家や芸術家、たとえばピカソ、ロダン、ジイド、プッチーニなどが極東の舞台女優に賞賛の言葉を残しています。

九代目市川団十郎を尊敬していた音二郎は、団十郎が別荘を構えていた茅ヶ崎に貞奴とふたりで移り住みます。

茅ヶ崎に欧米のような本格的な演劇学校をつくりたい、という夢を音二郎はもっていたといわれます。夢なかばで早世したのは残念なことでした。



端正をきわめた映像 小津安二郎

どうでもよいことは
流行に従い

重大なことは
道徳に従い

芸術のことは
自分に従う

これは今も世界的に根強い評価を受ける映画監督・小津安二郎の言葉です。

昭和21年(1946)11月3日、一人の紳士が東海道線茅ヶ崎駅のプラットホームに降り立った。終戦の翌年だ、ホームはリュックサックを背負った群集であふれていた。代用食のさつまいもでも手に入れようと東京や横浜から近い農村(茅ヶ崎)に買出しに来た人たちだった。そんななか、まっしろいワイシャツ、臙脂のネクタイ、黒い革靴、背広と同色のソフト帽、といったスタイルはひととき目を引いた。この人こそ、その年の2月にシンガポールから帰還した44歳の映画監督・小津安二郎だった。すでに巨匠の粹に入っていた映画監督の戦後の再出発、仕事始めの姿であったという。

(石坂昌三『小津安二郎と茅ヶ崎館』新潮社)より

以後、巨匠は茅ヶ崎に通いつめます。脚本を練るときにこもった定宿は中海岸にある茅ヶ崎館。練りあがるまで長期滞在していたから郵便物はいつも茅ヶ崎館か大船撮影所気付で届いていたといわれます。監督は想に滞ると、茅ヶ崎のまちなかをゆっくりゆっくりと歩きました。三大名作と評価する人も多い『晩春』『麦秋』『東京物語』のシナリオはいずれも茅ヶ崎滞在中の作品です。



漂えど沈まず 開高健

「あちらで真実のことばはこちらでは嘘で、
こちらで真実のことはあちらでは嘘である」

「後姿にこそ顔がある」

「悠々として急げ」

「漕ぎ、また漕げ。
ふりかえるな」

「二匹の水牛がぶつかる
一匹の蚊が死ぬ」

など多くの辛口の箴言を残した作家開高健(1930-1989)は、昭和49年(1974)仕事場として茅ヶ崎に家建て、やがてそこに居場所を定め、他界するまで住みつづけました。

娘の開高道子さんのこんな回想があります。

茅ヶ崎の仕事場で、初めての正月を迎えた年のことだ。家からは歩いて5、6分もすれば海岸道路134号線を横切って、すぐに波打ち際に見える海辺である。明けきらない暗がりのそこに、驚くべき数の乗用車、そして人びとのうごめきに、私たちは肝を抜かれるほど愕いたのだった。車があふれているのは、この茅ヶ崎海辺の初日の出を拝むためにそれほど沢山の人が遠方から訪れていることを物語っているわけだ。父が咳払いして、一結構なところに居るのだ。これからは

毎年、初日の出を拝もう。私の肩を軽く叩いて、のたもうたものだった。(開高道子『父開高健から学んだこと』文藝春秋)

遺された邸宅はいま、開高健記念館として多くの業績や人となり伝えていきます。ひとりの編集者はこう語ります。

酔っ払ったとき冗談で、オレが大文豪になって死んだら、ここは記念館になるんだぞ、諸君はそういう大切な仕事をやってるんだぞと言われてましたよ。私はどんなものかと思ってましたけど、ドアにパリのメトロのプレートを貼り付けたりして、この書齋が好きなんだという、そういうやり方で私らを励ましてたんですね。(北沢通正『無邪気な人』『悠々と急げ 追悼開高健』筑摩書房)